

《アメリカ軍艦の来訪》

過日、山形県立博物館で開催された山形県立博物館・同友の会の第10回の共同企画展「私たちのたからもの～郷土ゆかりの品々～」において、山形県立博物館所蔵の“秋元家文書より「アメリカ軍艦」の絵”が展示されました（右写真）。

この絵に描かれている船は、側面に並ぶ窓から大砲が覗いているので、軍艦だとわかるのですが、帆船であるところから、この船はペリー来航のそれより7年前の1846年（弘化3）、アメリカのジェームス・ビッドルが軍艦2艘で浦賀に来航した時の軍艦を描いたものだと思います。



この軍艦はアメリカとして初めて正式に日本へ開国・通商を求めてきたものですが、当時、日本は鎖国政策を実際に履行しており、外国との通商はオランダ以外には行わず、また、外交のすべては長崎で行うのでそちらに回航してほしいと主張したため、アメリカにとって日本への開国要求は失敗に終わってしまった事件です。

《黒船艦隊の来訪》

ジェームス・ビッドルの軍艦による日本開国が失敗したことにより、今後の交渉は強硬に臨むべきことを知ったペリー提督は7年後の1853年（嘉永6）7月8日に、今度は国書を携えるとともに蒸気外輪フリゲート（外洋航行可能な軽式の軍艦）のサスケハナ・ミシシッピ、帆走スloop（船団護衛用で10～20門の大砲を搭載した軍艦）のプリマス、サラトガを率いて浦賀に現れました。当時の様子を狂歌は、“泰平の眠りを覚ます上喜撰（宇治の高級茶のことです。）たった四杯で夜も眠れず”と表現しています。

この来航が、1857年（安政4）の下田条約【注】の調印から日本の開国につながることは一般によく知られた事実ですが、黒船が日本に来た目的の中に「地誌を調べ、物産のサンプルを入手すること」という意外な目的があったことを『黒船が持ち帰った植物たち』（小山鐵夫著、1996年（株）アポック出版局発行）や『ペリー艦隊日本遠征記』制作ストーリー（株式会社オフィス宮崎、インターネット）などを読んで初めて知りました。そこで、今回はこのことについて簡単に紹介してみたいと思います。

【注】 1854年（嘉永3）の日米和親条約を修補する目的で結ばれた条約で、アメリカ人の下田・箱（函）館での居留を認めると、アメリカと日本の貨幣を同種同重量で交換し、日本は6パーセントの改鋳費を徴収することなどを定めたもの。

《1853年（嘉永6）、1854年（嘉永7）の第1回の調査》

第1回目の調査は、1853年（嘉永6）のペリー提督の第1回目の来航時と翌1854年（嘉永7）の再来時で、ペリー提督自身の黒船艦隊によって行われていますが、ペリー提督は、大統領の開国・通商を求める親書及びペリー提督の信任状と書簡を日本に渡すほかに「アメリカ北太平洋遠征隊」の名のもとに、在マカオアメリカ領事館員ウィリアム氏とモロー博士（ハーバード大学のエイサ・グレイ博士の友人）等を遠征隊に同行させ、植物（標本総数353種（内新種34種））や鳥類、魚類、貝類を収集し、その標本をアメリカに持ち帰りました。

- ◆艦隊に乗り組んでいた人々・・・①絵師ハイネ、②国務省派遣のはく製つくりや植物収集役・モロー博士、③艦隊付き軍医ファースとグリーン、④主任通訳官ウィリアムス
- ◆担当者・・・①主として鳥類の標本収集はハイネ、②魚介類の標本の収集はペリー提督の監督下で、③植物関係は、その収集と保存処理がウィリアムス、ファース軍医、グリーン軍医、モロー博士
- ◆採取地・・・浦賀、横浜、伊豆下田、箱（函）館
- ◆遠征報告書（第2巻）作成

(1857年)・・・①鳥類学者のジョン・カッション博士(フィラデルフィア博物学協会)、②魚類はペリー提督の友人ジェームス・ブレブート、③貝類はペリー提督の友人ジョン・C・ジェイ博士、④植物はモロー博士を通じてハーバード大学のエイサ・グレイ等。

◆不思議なこと・・・・・・・・・・収集された鳥類、魚類、貝類の標本類には、きれいな挿絵が掲載されているが、植物に関しては、収集された標本の整理が後日ハーバード大学のエイサ・グレイ教授の手で行われたものの、国務省が植物関係の調査資料を握ってしまい、更に、ペリー提督のところまでに約束されたとおりに標本に関する報告がなされなかつたため、かろうじてグレイ教授がまとめた新種記載を含む乾燥標本の目録のみが掲載された。

#### 《1854年(嘉永7)から1855年(安政2)にかけての第2次調査について》

1853年(嘉永6)にヴァージニア州のノーフォークを出帆した時点ではロジャース・リングゴルト隊長の指揮下に置かれていたものの、この黒船船団は、二つの航路に分かれて集結地である香港に向かい、1854年(嘉永7、11月27日で安政元年)5月に集結しました。しかし、ここでリングゴルト隊長が罹病したため、以降はリングゴルト隊長の下で副隊長を勤めていたジョン・ロジャース大尉が隊長となって第2次調査が進められることになり、香港から北上して探検・測量するとともに大掛かりな植物採集を行うのですが、この第2次の調査も元々その計画はペリー提督によるものであったそうです。結果、第2次調査では、第1次の採取をはるかに超える数の採取を行い、植物の新種63種を同定しています。なお、「ロジャース・リングゴルト探検隊」は、ペリー艦隊と同様に太平洋蒸気船航路の開拓とアメリカ捕鯨船員の保護活動で香港まで来たのですが、中国では「太平天国の乱」中であったため、まず、アメリカ人保護活動に当たり、それから日本に向かっています。

- ◆採集に関わった黒船・・・・旗艦ヴィンセンス号(ライト博士乗船)とコック号(スモール氏乗船)
- ◆乗り組んでいた科学者・・・・植物学者のチャールズ・ライトと助手のジェームス・スモール(当時は軍人)。採取後の本国での品種同定は植物学者のハーバード大学のエイサ・グレイ博士がかかわった。
- ◆採取地・・・・・・・・台湾、尖閣諸島、上海、沖縄、小笠原諸島、奄美大島、徳之島、種子島、鬼界島、鹿児島湾、伊豆下田、浦賀、箱(函)館、岩内、宗谷岬、カムチャッカ半島西岸

#### 《ペリー提督監修の『ペリー艦隊日本遠征記』》

ペリー提督の黒船艦隊が行った上記調査については、ペリー提督が自分と部下のメモや日記から歴史家のフランシス・L・ホークスに依頼して編纂してもらい、ペリー提督が監修して『ペリー艦隊日本遠征記』として出版されました(原本はA4サイズで1巻が530ページ、2巻が約500ページ(海図数枚を含む)、3巻700ページに及んでいます)。なお、『ペリー艦隊日本遠征記』は、岩波書店の文庫本、万来社、角川ソフィア文庫(上・下)などから日本語版として出版されています。

- ◆第1巻・・・・大部分書簡報告(コンラッド国務長官代行からケネディ海軍長官宛のフィルモア大統領の日本遠征に関するペリー提督への指示内容の書簡、それを受けたケネディ海軍長官からペリー提督への指示内容書簡や海軍とペリー提督の通信記録、幕府との交渉記等)であるが、ペリー提督自身の日本来航の各種記録や下田や箱(函)館等日本の町の様子、風俗などの記録もある。
- ◆第2巻・・・・博物誌」が中心(日本の植物、鳥類、魚類の調査記録が掲載され、前述のとおり美しいカラーのスケッチがリトグラフ(石版画:平らな石の上に描画し、印刷する版画)で沢山収録されている。さらに「海図」も掲載されている(当時は鉛の球を落として海底までの深さを測った。)。ただし、ペリー提督が「博物学に関する報告」の序文の中でぼやいているとおり、提督が最も待ち焦がれていた日本の植物に関する研究成果については、国務省がその貴重な調査資料を握ってしまい、第2巻の出版までにエイサ・グレイ博士の報告資料の提出が間に合わなかった(『ペリー艦隊日本遠征記』制作ストーリー)。**【注】**
- ◆第3巻・・・・遠征隊に同行のアメリカ海軍従軍牧師ジョージ・ジョーンズが行った天体観測の記録である。

【注】 兵庫県立人と自然博物館の松原尚志氏は、同博物館のコレクション紹介・「日本遠征記」において、「日本産植物図譜の計画をしたモロー博士とペリー提督、第1回及び第2回の調査により持ち帰った植物標本を研究したエイサ・グレイ博士との間のトラブルによって原稿の提出が遅れ、かろうじてグレイ博士がまとめた新種記載を含む乾燥標本の目録のみが掲載されたにとどまった。」と述べています。結局、植物標本類は、ハーバード大学の植物標本館に保存され、また、ニューヨーク植物園にも保管されました。

1975年（昭和50）の秋に昭和天皇・同皇后両陛下が訪米され、ニューヨーク植物園幸啓の際に、植物園のほぼ完全な植物標本1セットをご覧になっており、また、『黒船が採取した函館の標本里帰り展』（図書裡会・函館日米協会・函館植物研究会（平成7年））によると、ニューヨーク植物園で保管された植物標本と、ハーバード大学で保管された海藻標本が平成7年（1995）に日本に里帰りして函館市立博物館において展示されました。

### 《ハーバード大学のエイサ・グレイ教授の植物の研究結果》

前述のとおり第1次、第2次を通じて採集した植物標本はすべてハーバード大学にもたらされ、エイサ・グレイ教授によって、同定・研究されたのですが、第1次の採取植物標本は353種に上り、その中で新種は34種でした。そして、シロバナノハンショウズル（伊豆下田産）、キンギンボク（箱館）、ツボスミレ（横浜）、エゾノタチツボスミレ（箱館）、モミジイチゴ（横浜）等は比較的普通の日本産の植物でした。第2次の植物採集標本は、第1次のそれより遥かに大量で、新種63種の中で、ヤグルマソウ属及びシヨウジョウバカマ属の二つの新属が共に北海道から発表されています。また、ドクウツギ（下田）、ウバメガシ（下田）、クリンソウ（箱館）、クマイチゴ（箱館）等の馴染み深い種も見られます。

以上の様な研究の結果、エイサ・グレイ教授はアメリカと日本の植物相がよく似ていることを初めて明らかにしました。例えば、日本のザゼンソウと北米のスキャンクキャベージ、北米西海岸からコロラド州に分布するコウホネ属の一種や北米東部産のカタクリ属の一種、アメリカハナミズキと日本のヤマボウシなどです。

### 《終わりに》

前述のとおり、ペリー提督の浦賀への再来は1854年（嘉永7）ですが、この時は、①漂流民の保護、②外国船への燃料・食料の補給、③交易の開始という3つの要求を断固日本側に飲ませることでした。ためにペリー提督は、“日本がこれまでの政策を見直さなければ敵国とみなし干戈（かんか：武器、戦闘の意味です。）も辞さない”という強固な態度で臨んだのですが、老中の阿部正弘から全権を任された林大学頭復斎は、“日本は善政を敷いており、非道の政治と決めつけられるのは迷惑千万、双方とも積年の恨みがあるわけでもない。強い戦争に訴えるまでもないと思うがどうか”とペリー提督に対して切り返して沈黙させ、③の要求はきっぱりと撥ね退けたものの①及び②については協議に応じ、長崎のほか、下田と箱（函）館を開くことを新たに認めることにしました。これらのことについては、日本史にかかる諸本で述べていることですが、この時代、アメリカの国務省や海軍がペリー提督に対して軍隊としての厳しい規律を求めつつ動植物や絵画の専門の者等を同道させ、また、ロジャース・リングゴールド探検隊を派遣して日本の沿岸要所において動植物の調査を実施させ、そこで得た標本類を本国に多数持ちかえって基礎研究をしていたことは驚きの事実でした。

### 【参考にした文献など】

以上を纏めるにあたっては、『黒船が持ち帰った植物たち』（小山鐵夫著、1996年（株）アポック出版局発行）、『ペリー艦隊日本遠征記上・下』（角川ソフィア文庫）、金沢大学附属図書館報・こだま 第151号『ペリー提督“日本遠征記”ともう一つの遠征記録』（山下洋一、2003年10月1日発行）、横浜開港資料館・「開港の広場」、『黒船が採取した函館の標本里帰り展』（図書裡回・函館日米協会・函館植物研究会、平成7年）、『日本遠征記』（兵庫県立人と自然博物館、インターネット）、『山形県立博物館ニュース第106号』（1991. 2、山形県立博物館）、『古文書を楽しむ～日米一触即発を回避』（1907. 08. 21、インターネット）、『ペリー艦隊日本遠征記』制作ストーリー（株式会社オフィス宮崎、インターネット）、「日米交流・ペリー提督と黒船艦が集めた日本の動植物標本」（インターネット）、Wikipedia等を参照しました。